
うさぎとぴょんとお年玉

みけぺん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うさぎとぴよんとお年玉

【Nコード】

N8955P

【作者名】

みけぺん

【あらすじ】

2011年元日、仮面ライダーオーズこと火野映司は鴻上から『人工コアメダル』を授かる。ピンク色のそのメダルには、驚くべき力が秘められていた——！なんつってますが、コンセプトは「笑う門には福来る」。山なしオチなし意味もなし、笑えればそれでいいアホ話！去年の嫌なことを忘れたい皆様、さあ御立合い御立合い！※1／4追記・読者の方から頂いたイメレスをあとがきにて追加しました。ぜひそちらもご覧くださいませ※

(前書き)

とりあえず、深いこと考えずに笑ったもん勝ちってことにしておいてください。

『ハッピーニューイヤー火野君！ 2011年、新たな一年の始まり！ そして同時に、我々もまた生まれ変わり、新たな命を営んでいく！ おめでとう、2011年の私達！』

これは、日々頑張ってくれている君へのささやかなプレゼント——いや、お年玉だ。ぜひ受け取ってくれたまえ！』

「——というわけで、どうぞ」

肌を突き刺すような寒さと、はらはらと舞う雪の中、洒落たファー付きコートで着膨れした里中が、大判のモニターを抱えたまま促す。録画映像だったのだろうか、モニターの向こうで相変わらず常人よりも1オクターブ上をいった大げさなテンションで高説していた鴻上の姿はふつりと消えて、用済みと言わんばかりに液晶が暗転した。その横で、映像の鴻上が掲げていたのと同じケーキを乗せたワゴンを、苦虫を三桁単位で噛み潰したような表情を浮かべた後藤が無言で押し出す。

「……はあ、どうも……」

へこり、と申し訳程度に頭を下げる。

降り積もったそばからみぞれ状に融けていく雪の絨毯をしゃくしゃくと踏んで、映司はケーキに歩み寄った。

二段重ねの豪華なケーキ。白い円周を赤いイチゴが彩った、典型的なショートケーキだ。

いつもなら、ホイップクリーム製の純白のステージに「HAPPY BIRTHDAY」などとチョコで綴られているところだが、今日は「あけましておめでとう 二〇一一」と日本語が縦に並んでいる。さすがは正月仕様といったところだろうか。

そして、その文言の末尾辺り——赤いイチゴたちに紛れるようにして、それは鎮座していた。

「……これ、って……」

「コアメダル!？」

指でクリームを拭き取りながら摘み上げた映司よりも先に、脇で面倒くさそうに眺めていたアंकが食いつく。

金の縁取りがされた、直径三センチほどのメダル。

内部は核の証とも言える透き通った鮮やかな色彩の中に、抽象化された生物の姿が刻み込まれている。

しかし、そのメダルの色と形に映司は不思議そうに目を瞬かせ、確かめるように日差しへ翳した。

「なんだろう、これ……うさぎ? ていうか、ピンクのメダルは初めてだな。こんな色もあったんだ」

「——バカ言え。こんなコア、オレは見たこともないぞ」

不審げに目を細めたアंकの台詞に、映司は「へっ?」と間拔けな声を漏らす。

「残念だが、そのメダルはお前らが求めている古来からのコアとは違う。いわば、人工コアメダルだ」

「じ……人工!? コアメダルって、新しく作れるもんなんですか!？」

「そもそも、グリッド自体が大昔の科学者によって生み出された人工生命体だ。生物の力をメダルとして凝縮させる技術——それを復元さえ出来れば、新たなコアを生み出すことなど造作もない」

淡々と説明する後藤に、映司は「なるほど……」と納得しながら、手の中にあるピンクのメダルを何度も見つめ直す。

「ただし、その技術の復元も容易じゃない。メダルを作り上げる過程が記された、八百年前の資料も大部分が失われ、あとは時間をかけて手探りするしかなかった。

そのコアメダルは試作段階のようなものだ。お前が自由に使ったいい代わりに、実際オーズとしてどれほどの力を発揮できるか計測させてもらう」

「……ほお。要は実験台って訳か。せっせとメダルを稼いでやってるってのに、鴻上の奴も随分とお偉く成り下がったことだな」

顔の筋肉を大仰に動かして忌々しげに因縁をつけるアंकに、後藤は小さく舌打ちした。

「でも、うまくいけばもっと効率的にヤミーを倒せるってことでしょ。そうすれば、犠牲だって減らせる……使わない手はないよ」

再びメダルを日に翳し、宝物を手にした子供のように映司の目が輝いた。

薄桃色の小さな円の中に行儀よく収まった、長い耳とつぶらな双眸。メダル集めに興味はないが、コアが増えればオーズの戦い方のバリエーションも広がる。

これから先もグリードとの戦いが強いられている以上、必要であるに越したことはない。

それに、本来の自分の物ではなかったとはいえ、新たなコア——しかも今までに存在しなかった全く新しい物——が手に入ったという事実は、アंकにとっても有益なはずだ。

ちらりと様子を窺えば、後藤をケーキ越しに睨みつけながらも、口元がどこか嬉しそうに笑みを刻んでいる。

近頃ナーバスな日が続いて、比奈と共に手を焼いていたが、これで少しは機嫌を直してくれそうだ。

その時、どこからともなくひらりと降下してきた赤い鳥が、平べったい無機質な翼を器用に羽ばたかせて映司の前を往復した。

「あれ、タカちゃん？」

「……ヤミーが出たか。行くぞ、映司」

「だっ、ちよっ、待ってっ！——ああっ、後藤さん、里中さん、ありがとうございます！ 鴻上さんにも喜んで使わせてもらいますって伝えといて下さい！」

それからあけましておめでとうございます今年もよろしくー！！」矢継早にまとめて言い置くと、案内を始めたタカカンドロイドとそれに追従して走るアंकに続いて、映司は駆け出した。

——めでたい元日からヤミーをフル稼働させようとは、グリードも忙しないな、と呑気な事を思う。

しかし、町内会の親睦を深める平和なイベントをことごとくぶち壊した、目の前のヤミーの姿に気を引き締めた。

正月恒例の餅つき大会でも開いていたのだろう。

鋭い牙の発達した凶悪な顎と長い触角が印象的な、アリの様相を呈したヤミーの足元には、まだ米粒の形が潰れきれない出来損ないの餅の塊が横たわっていた。

さらにそのそばには、年季の入った木の白と杵も転がっている。

ブルーシートの上に並べられたパイプ椅子は不規則に倒れて放置され、参加者の気配はすでに無くなっていた。早々に避難してくれたようだ。

「アंक。メダル！」

「……はあ。もっと丁寧に頼みやがれ」

もはや単語の陳列だけで伝わってしまう台詞に溜息を吐きつつ、アंकは自らの右掌底からほじくり出した三枚のメダルを、手首のスナップだけを利かせて放り投げる。

寸分変わらず、差し出された映司の手に収まったのは赤い鷹と黄色の虎、そして緑色のバッタのメダル。

すでに腰へ装着していたドライバーの挿入口の、まず両側に赤と緑を押し込み、次に真ん中へ黄を入れる。

右腰に引っ掛けられたスキャナーを取り外す動作で、メダルが入ったドライバー前部のスレイターと呼ばれる板状の部位をがたりと傾け、一列に並んだメダルの前でスキャナーを滑らせた。

「——変身！」

タカ！　トラ！　バッタ！

掛け声の直後、メダルを認識する音声。

さらに、否が応にも聞き慣れてしまった歌が続き、メダルと同じ三

色の光が映司の体で弾けた。

彼の細身を、黒をベースにしたアーマーが覆い、胸部のサークルから三色のラインドライブが脚・腕・頭部にそれぞれ巡っていく。

顔の前面では大きく翼を広げた赤い鳥がエメラルドグリーンの複眼を覆い、両腕には獰猛な獣を彷彿とさせる鋭い黄色の鉤爪が装填され、膝から下に昆虫じみた緑色の関節が並ぶ。

そして胸部のサークルに描かれた、メダルと同じ鷹・虎・バッタの象徴化された刻印。

「……オーズ!!!」

ヤミーが低く唸ると同時に、映司の背後に控えていたアंकが、示し合わせたように身を退く。

次の瞬間、猛スピードで突進してきたヤミーに、映司は咄嗟に伸ばした鉤爪を突き出していた。

がしゃん!という激しい金属音。

よろめいたヤミーの胸元の傷口から、鈍色のセルメダルがばらばらと散った。

「映司、こいつはウヴァのヤミーだ。どこかに”親”がいるんだろうが、本体さえ叩き潰せば問題ない」

「……てことは、あの大食いの人や女医さんみたいに、欲望の元の人体を借りてる訳じゃないのか。なら容赦なく戦える——って、アंक! 刑事さんからホイホイ離れるなっつの!」

さりげなく解説しながら、泉信吾の体を放り出し、散らばったセルメダルにがつく赤い異形の右腕に怒鳴る。

その隙を突いて、ぶしゅっ、とヤミーの顎から茶褐色の液体が飛び出した。

「うわあ!?!」

素っ頓狂な声を上げて横に跳ぶと、それまで立っていた青いシートが蒸気を上げて瞬く間に溶けてなくなり、下の芝生と地面も抉れてしまう。

ついでに、その場所に転がっていたセルメダルもフチの一部を残し

て無くなっていた。

「ちッ、やっかいな能力を付けやがった」

メダルも溶かすと分かるや否や、身の危険を察したアंकが大人しく泉の体へと戻る。

恐らくは強い酸性の毒液のようなものだろう。

そういえばアリって、毒で獲物を殺して運ぶって聞いたような——と映司が考える間に、またもや毒液が襲い掛かってくる。

「そ、そうだ！ さっきもらったメダル！」

対策を必死に練っていたが、ふと『お年玉』の存在を思い出し、慌てて取り出す。

ピンク色のそれを片手に構えて——映司は、はた、と動きを止めた。

「……アंक、どうしよう。困った」

「ああ！？」

「……このメダル、右と真ん中と左のどこに入れるんだろ」

メダルを指で摘まんだまま、振り返った無表情なオーズの仮面に、びき、とアंक（正確には泉）の額へ青筋が浮かんだ。

「ッ……この、バカが！！ 使い方も聞かないで持ってきたのかお前は！？ 本当にバカだな、相変わらずにも程があるぞバカ！！」

「年始からバカバカ言うなっ！ しょうがないだろ、新しいメダルなんて言われてつい舞い上がっちゃったんだよっ！」

「仕方ない、この際適当に使っちゃえ！」

「んなムチャな！？ せめて『ここじゃないのか』とか当てずっぽでもいいから言えよ！！ メダルのことが分かるのお前だけなんだから！」

「今までにない新しいメダルなんだろ、なおさら知るか！！ さっさとやれ、バカ！」

「ああー傷付くなもう！ 分かったって！！」

タカメダルに与えられた反射神経で毒液をひよいひよいと避けつつ、安全地帯でがなり立てるアंकに自棄になりながら返した。

あとは本当に適当だった。

映司は避けた拍子にヤミーの懷へと入り込み、足払いを仕掛けて地面に転がす。

「ええいもう、これでいいや!!」

同時進行で左側に装填していた緑のメダルを取り出し、代わりにピンクのそれを押し込んだ。

素早く右手に掴んだスキャナーを滑らせる。

タカ！　トラ！　ウサギ！

発せられた認識音声に、ああやっぱりうさぎだったのか、とぼんやり思う。

脚部の装甲が瞬時に変移し、太腿を走るラインは薄桃色に染まる。そして膝から下は――動物のそれを思わせる、白いふわふわの毛皮に覆われた。

「……えっ？　何これ？　なんか……今までのと毛色が違うような。あ、うまいこと言っちゃったな、おれ」

思わぬ変化への動揺と、新しい物に対する興奮が入り混じった微妙な声色で、映司はその足をぺたぺたと触った。

今までの脚部を形成していたバッタ・象・チーターの時はシンプルで、どこかのつぺりとした外装が特徴的だったが、言うなればこのウサギレッグはそのどれとも全く違った様相を表している。『人工』であるが故の効果なのだろうか。

本人は気付いていないが、漆黒の滑らかな強化皮膚に覆われた臀部でんぶには、実物のうさぎに見られる綿帽子のような尻尾もつくっついていた。

背後に立っているせいで、尻尾が目に入ってしまったアंकは啞然として口出しするのも忘れている。

その間にもヤミーがむくりと起き上がり、懲りずに毒液を吐き出した。

「おおっと！」

映司は地を蹴って回避する。

瞬間、体が数メートル後方へ、ぴょんと跳んだ。

「わ……す、すごい！　なんだこれ！」

バッタメダルを使ったときとも違う感覚に、映司は驚愕した。

今度は二、三発吹き付けられた毒液に対し、やはりぴょんと横に跳んで回避する。

ちなみに「ぴょんと」というのは喻えでも何でもない。

どういう原理か分からないが、実際に地を蹴って跳躍すると、ゴムを弾いた時に発するような「ぴょん」という間抜けな音が後を引くのだ。

その動きは、まさしく猛獣の牙から巧みに逃げるうさぎのごとく。

急に変化したオーズ——名付けるならばタトウサの動きに翻弄されるヤミーの目の前へ、映司はぴょんと飛び降りた。

「ハアッ！！」

気合を込めて片足を振り抜く。

白い毛並みに覆われた爪先はヤミーの鳩尾をしっかりと捉えた。

ヤミーはメダルを血のように吐き出しながら吹っ飛ばされる。

バッタレッグは高度な脚力を発揮するのに”溜め”が必要だったが、このウサギレッグはバッタに比べれば劣るものの、溜めを必要とせず、ほぼ常にその力を行使できるようだ。

だがしかし、決定打には欠けるのも事実らしい。

ヤミーはよろめきながらも立ち上がり——おもむろに地面を猛スピードで掘り出した。

地中活動にも長けているのだろう。アリの姿も伊達ではないという事だ。

引きずり戻す間もなく、ヤミーは地平線の下へと消えた。

「うさぎのメダル……足の所に入れてこの効果なら、ひょっとして」
軽く思案に耽りながら映司が呟いた。

迷うことなく右のタカメダルと、左のウサギメダルを外す。ウサギメダルをそのまま空いた右へ、左には再度バッタメダルを嵌めてス

キャンニングした。

ウサギ！　トラ！　バツタ！

認識音声の後、両足に緑の関節が再び宿る。

代わりに仮面の一部を構成していた赤い鳥がいなくなり、エメラルドグリーンだった複眼が朱色に染まった。

黒を基調とした仮面の基盤に、薄桃色が巡る。

そして、ぴょん！とやはり快音を伴って、頭頂から二本一對の、これまた白い毛皮に覆われた長い耳が飛び出した。

「おお、やっぱり！　このメダルって、どこに使ってもいけるんだ！」

びよんびよんと冬風にそよぐうさぎ耳を凝視したまま固まっているアंकをよそに、映司は自分の推測が合っていたことを純粹に喜ぶ。変化した頭部の外観を自分で見て確かめることは難しい。そのせいでうさぎ耳の存在にも気付かないらしい。

瞬間、ぴくり、とうさぎの片耳が何かに反応し、映司は足元めがけて右腕の鉤爪を突き刺した。

「ぎいっ！」

耳障りな悲鳴が、破壊された地面から漏れる。

ちょうど地中から這い出して至近距離から毒液を吹きかけようとしたタイミングで、その頭に映司の鉤爪が直撃したのだ。ひとたまりもなかった。

見ていたアंकは息を吞んだ。

外観はともかく、あのうさぎ耳には高い聴力が付与されているらしい。今の攻撃も、地中に潜ったヤミーが地盤を掘削する音を精確に聞き取ったからこそできたものだと考えれば納得がいく。

だが、

「……く、うう、ぐああああっ！」

顔を手で押さえて呻きだした映司に眉を顰めた。

「映司？　おい、どうした！」

「ううっ……ああッ、わああああっ！」

問いたですアंकを無視して、映司は足元で痛がっているヤミーを放置し、何かに引っ張られるように走り出した。

餅つきの会場となっていたのは公園。

その片隅に佇んでいた一本の樹にたどり着くと、映司はがりがりがり！と凄まじい音を立てて幹をかじり出した。

「お前、何やってんだ！　とうとうイカれたのか！？」

「うるさい！　なんだかこうしないといけないんだ！」

肩を掴んで引き剥がそうとするアंकに答えにならない返事をして、乱暴に振りほどく。

文字通り樹にかじり付いて離れない映司は冗談みたいなスピードで、顔の前面にいつの間にか生えていた平たい門歯（やはりうさぎの物だろうか）のような薄桃色の装甲を使い、幹の組織をどんどん削っていく。

それを呆然と眺めながら、『試作段階の人工メダル』を使った副作用か？とアंकは頭のどこかで冷静に分析していた。

見れば、ヤミーの姿はすでに無い。痛みから回復して、また地面に潜りこんだのだろう。

がりがりがり、と、言うなればウサトラバとなったオーズが一心不乱に樹をかじり続ける。

そこでふと気が付いた。

よく観察すると、オーズはただ無計画に樹をかじっているのではない。まるで彫刻で像を作り上げるように、かじり残した部分で何かの形を成しているのだ。

がりがりがり。がりがりがり。

しばし耳障りな音が続き、ある瞬間、がぎっ！とそれまでと違う音がピリオドとなった。

「はあっ……はあっ、で、できたあ！」

動悸で肩を上下させながら、映司が高らかに宣言する。

中ほどが不自然に抉られた幹の傷口に埋まるようにして、それは形を横たわらせていた。

映司は壊れ物か、生まれたての赤ん坊を扱うような丁寧な手つきで、それを両手に掲げる。

——細長い柄の長さは、オーズの身長の高割ほど。片方の先端には、幅広の潰れた円筒のような物が垂直に突き刺さっていた。

映司がものの一分前後で樹をかじって作り上げた物体に既視感を覚えて、アंकは視線を動かす。

そこには、臼と作りかけの餅と一緒に転がった、木製の杵があった。しかし、映司が今持っている即席の杵の方が、大きさでは若干勝っている。

「……映司、お前それで一体何を」

「おりゃああああっ!!」

アंकの問いを遮って、映司は杵を猛然と振り上げた。

刹那、土をまき散らして飛び出したヤミーが正面から躍りかかる。

すかさず振り下ろされた杵の、槌の部分が狙いを定めてヤミーの脳天へ叩き込まれた。

ずがん!という破壊音と共に、ヤミーは成す術もなく地面へと沈む。実はしっかりと敵の動向を探っていたらしいうさぎ耳が、ぴこぴこ揺れていた。

「はあ、はあ、……うおおおっ!!」

荒い息で雄叫びを上げたオーズは、杵を片手に握ったまま、ドライバーから右と真ん中のメダルを抜き取る。

映司自身が行っているのではなく、何かの意思に操られたかのような動作だった。

ピンクのうさぎが今度は真ん中に差し込まれ、右側の空白を赤い鷹が埋める。

そして、すかさずスキヤニング。

タカ! ウサギ! バッタ!

仮面の頭頂から長い耳が失せて、複眼は朱からエメラルドグリーンに戻り、赤い翼が広げられる。

そして、鉤爪が付いていた部分にもこりと毛皮が生えて、肘から先の腕の部分を覆った。

「おおおおおおっ！」

オーズはスキヤナーをベルトに戻さず、再度メダルの前で滑らせた。

スキヤニングチャージ！

最大出力発動を伝える音声。

真ん中にピンクのうさぎの顔面が刻まれたサークルから白い光がほとぼしり、ラインを伝ってオーズの両腕へと供給される。

白い毛皮が体積を増したように、ぶわ、と一斉に逆立った。

「おおおおおおっ！」

映司はその両手で杵をしっかりと握り、地べたに這っているヤミー目にかけて振り下ろす。

ぺったん！

そうとしか表現しようのない音を立てて、ヤミーの頭を杵が殴りつける。

同時に、両腕から杵の柄を通してメダルのパワーが打ち込まれる。

それだけでも十分なダメージだが、映司は止まらずに柄をまたもや振り上げる。

「うおおおおおっ！」

ぺったん！　ぺったん！

連続で杵がヤミーを打ち据えた。

「おおおおおおっ！」

ぺったん！　ぺったん！　ぺったん！　ぺったん！

杵を上げて下ろすスピードが徐々に上がっていく。

「おおおおおおっ！」

ぺったん！　ぺったん！　ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん！

「おおおおおっ！」

ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん、ぺったん、

名人も顔負けの気迫と勢いでもって、映司はヤミー相手に高速の餅つきマシーンと化していた。

今ここに、炊きたての糯米もちこめが入った臼を差し出したなら、腰のある餅が瞬く間に出来上がっただろう。

——そして。

「セイヤああああッ！！」

最後に渾身の力を込めて、映司は杵を振り下ろした。

衝撃。轟音。閃光。爆発——

それが、オーズ・タカウサバの前に敗れ去ったアリヤミーの最期だった。

「……映司。いつまでそうしてる」

ヤミーが爆散するや否や、がくりとその場に膝を付いたオーズの肩を叩こうとして、アंकは手を引つ込めた。

肩口と背中にも、漆黒のアーマーに不似合いなふわふわ毛皮が生え揃っているのを見てしまったからだ。

触り心地自体は悪くなさそうだが、数分前にあの尻尾とうさぎ耳を目撃した後だと、抵抗感の方が先立った。

「ああ……はあ、ご、ごめん、なんか、このウサギメダルを頭のとこに入れた辺りから、コントロールが……」

「……確かに使えるメダルではあるが、そいつは一度鴻上に返した方がいいな。作り直せて文句を付けてやれ」

「ええっ、いや大丈夫だって！　ちょっと今回は初めてだったから調子悪かっただけだって」

「つべこべ言うなさっさと変身解けメダルを渡せオレがのし付けて叩き返してやる早くしろ！！」

右手の人差し指で、黒光りする鋭い爪を突き付けてアंकが捲し立てた。

毎回、あんな緊張感の抜ける格好に変身されてちゃ適わないと思ったからだ。

映司は納得がいけないのか、小首を傾げながらも、渋々ドライバーからメダルを取り外す。

オーズの鎧が光と化して散り、生身の映司だけが取り残される。

「まったく……お前も実験台にされるとは、堕ちたもんだな」

「別に、おれはそんなつもりないし、ていうかある意味お前のせいでもあるぴょん」

じやらり、とコアメダルを受け取ったアंकの皮肉に映司が不満そうに答え——えっ、と二人同時に顔を見合わせた。

「……おい、お前……今なんて言った？」

「へ……？　あれ？　おれ、今普通に喋ったぴょん」

「……何ふざけてんだ映司」

「ふっ、ふざけてないぴょん！　だあああっ、いやいや！　本当だぴょんっ、真面目に喋ってるぴょん……ってこれじゃ伝わらないぴょん！」

「ぴょんぴょんうるせえ！　からかってんのか、しまいには殺すぞ！！」

「だからちゃんと喋ってるって言ってるぴょん！　なんか知らないけどぴょんって言っちゃうぴょん……うわあああどうなってんだぴょん！？」

「——おやおや。これは思わぬ副作用が表れましたねえ」

パニックに陥る映司と、その姿に苛立ち始めたアंकを宥めるように、低い抑揚のない台詞が投げかけられた。

振り向くと、黒いジャケットの腕に、無機物とはいえ生気を根こそぎ奪われたような不気味な目付きの人形を座らせた、眼鏡の男が銅像のように佇んでいる。

ドクター真木。鴻上の元でメダルの研究をしているという男。

それを認めるや否や、アंकはずかずかと真木に歩み寄り、胸倉を掴み上げた。

「おい。副作用ってどういう意味だ」

恫喝すると、真木は怯えた様子も見せず、腕の人形に語りかける。

「鴻上会長から渡して頂いた人工コアメダルのことですよ。私も開発に携わりましてね、今の戦いも観察させてもらいました。なんせ試作段階ですから、実用したらどんな効果が表れるか分からない……もしもの時のアフターケアって所です。

しかし、想像以上に面白い結果が出ました。まさか、うさぎの生命力を凝縮したメダルが、不完全とはいえあんな力を発揮するとは……」

「ちょっと待て。つまりこういうことか？ 今、映司がぴよぴよん言ってるのも、このメダルを使って変身した後遺症だっていうのか？」

「……結論から言えば、そうなりますね」

訥々と説明する真木の返答に、アंकは大きく舌打ちした。

そこへ、自分の喉元を押さえた映司がいそいそとやってきた。

「あの……後遺症とか副作用って言ってましたけど、それはいずれ治るってことですかぴよん？」

「ええ。恐らくあなたは、人工のメダルを使用し、一時的とはいえコントロールを失った事に対して、肉体がショック症状を起こしているのだと思われます。方法は色々ありますが、原因である人工メダルの使用をしばらく控えれば、そのショックも落ち着いて元に戻ります」

「よ、良かったぴよん……一生治らないって言われたらどうしようかと思っただぴよん……」

「——ただし」

くるり、と背を向けた真木が、胸を撫で下ろす映司に続けた。

「残念ですが、いつ治るかまでは保証しかねます」

「……え？」

「肉体からショック症状が抜けるのがどのくらい先になるかは、あなただけという事です。つまり、十分後に治るかもしれないし、明日にならないと治らないかもしれない。あるいは一週間、一ヶ月……ひょっとしたら、次の大晦日が来てもそのままかもしれません。最悪の場合、ショックが治るよりも先に、あなたの人生の終わりが訪れる可能性も大いに考えられます」

「な、そ、そんな……」

「お大事にしてください、火野映司君。年初めから大変でしょうが、一番重要なのは『終わり』ですから。では、私はこれで」

さーっ、と血の気が引いていく映司を置いて、真木はつかつかと歩み去っていく。

告げられた残酷な事実映司はわなわなと震え、両手で頭を抱えた。

「そんなの……嘘だぴよ——ん!!」

絶望に満ちた嘆きの声は、初雪の降りしきる寒空に消えていくだけだった。

ずずず、と映司は雑煮のお澄ましを飲み干してから、口を開いた。

「……という夢を見たんだよね」

「……すごく微妙な夢ですね」

椀の底に沈んだ角餅をつつく映司に、その隣で伊達巻をかじった比奈が感想を述べる。

クスクシエの二階で、開店前の朝食に比奈が持ってきたお節と雑煮の残りを食べながら、二人は昨夜の初夢について語り合っていた。

すぐ横に置かれた赤い布のかけられたソファでは、アंकが与えられた冷凍みかんの皮むきに悪戦苦闘中。

「なんか、今年も大変になりそうだけど……無事乗り越えたいなあ」
もごもごと餅を咀嚼しながら、映司は窓の外を眺めた。

美しい無垢な初雪が、しゅらしゅらと世界を染めていった。

(後書き)

新年あけましておめでとうございますぴょん。

そして、拙作を読んでいただきありがとうございますぴょん。

さて――

「なろう」では二作目の短編となりましたが、まさかこんなアホ話を書く日が来るとは思わなかったぴょん。

この話は、知り合いにライダーが好きな男の子がいて、彼からもらった新年の挨拶の手紙に返事を書いていたとき思いついたものですぴょん。

せっかくだから、オーズの絵も描いてあげようとイラストを描き始めたら暴走して、気付いたら色付けまでしていたという始末だぴょん。

そしてふと、「今年は卯年だけど、うさぎメダルって無いんだろうか」と考えてしまったのがきっかけですぴょん。

そこから飛び跳ねたりウサ耳生やしたりするオーズのビジョンが浮かび、さらに、正月と言えば餅↓うさぎは月で餅つきをする、という連想ゲームを経て、暴走の末餅つきマシーンに墮するオーズにいたったんだぴょん。

でもって、変身とけても語尾に「ぴょん」が抜けない映司君を思い浮かべたら、猛烈に書きたくなっちゃったんだぴょん。

どうでしたでしょうかぴょん……。

でも夢オチはワンパターンすぎるだろ、とちょっと反省していますぴょん。

ちなみに、当初の予定では相手のヤミーは去年の干支にちなんで虎になるはずだったぴょん。

でも虎だとタトバとかぶるし、もっとバリエーションのある能力を持ってそうなヤミーにしたいということで、小さいけど実は相当な

高スペックだというアリに変更したぴょん。

あ、ちなみにあとがきでも語尾をぴょんに統一しているのはわざとだぴょん。

ぴょんぴょん言っちゃう映司君の台詞を書いていたら、それだけでものっそいおかしくて笑いが止まらなくなっちゃったぴょん。

で、もしたった一日だけでもいいから、日本中の人が全員ぴょんぴょん言ったら、楽しすぎて平和になって、去年の嫌なことも新しい年の不安もどっかいっちゃうんじゃないかと思ったのですぴょん。だから、今このぴょんぴょんあとがきを読んでニヤニヤしている人がいたら計画通り（ニヤリ）だぴょん。

何がともあれ、年始からこんなバカバカしい話に付き合っていただけたあなた様に心から感謝を申し上げます。

2011年が、少しでも多くの人にとって良い年でありますように。

1／4 追記..

拙作を読んで下さったモノカキ仲間の鉄槻緋色様から、おそれ多くもイメージレスポンスを描いていただきましたぴょん！

オーズで「ウサギコンボ」！もこもこうさぎ加減に感涙ぴょん。

>i16150—538<

思いつきと勢いで書いたアホ話が永久保存モノのお宝イラストに化けちゃったぴょん……。

なんという薫しべ長者パターンぴょん！？

今年はなんだかい感じになりそうな気がするぴょん。

鉄槻様、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8955p/>

うさぎとぴょんとお年玉

2011年1月9日04時36分発行